

# 子どもを虐待から護る

●目次

子ども虐待予防における看護職の支援 上野昌江—— 3

医療機関における子どもの虐待予防・対応——看護師 山本光映—— 20

母親を中心とした「ペアレンティング・サポート」——助産師 相川祐里—— 32

子どもを護り、子育てを支える仲間づくり・地域づくり——保健師 廣末ゆか—— 44

子どもの虐待とネグレクトの本質を知る——精神科医 鷺山拓男—— 54

子どもの虐待に関する痛ましい事件が各地で後を絶ちません。児童相談所の相談対応件数はここ数年で急激に増加し、二〇一八（平成三〇）年度では過去最多の約一五万九千件（厚生労働省速報値）に上ります。

その背景には、少子化の進展や家族形態の変化、地域とのつながりの希薄化など、出産や子育てをめぐるさまざまな課題が横たわっています。

そのような現状から、改めて母子保健活動を中心として、そこに携わる看護・医療職に焦点を当て、どうすれば子どもたちを護ることができるのか、支援のあり方や最前線の取り組みを提示します。

（編集部）

# 子どもの虐待とネグレクトの本質を知る——精神科医

鷺山拓男

わしやま・たくお ● とよたまこころの診療所長・社会福祉法人子ども虐待防止センター評議員

## はじめに

私は「子どもの虐待の真犯人は誰だろうか」と目を凝らして見た。

そして、私はそれが自分自身であることを発見した。

——エドワード・ジグラー

ベルギーの医師マーネフィー (Manette, C.) が子ども虐待の教科書的論文集『虐待された子ども』の第五版に寄せた虐待予防の論文<sup>1</sup>は、米国の心理学者ジグラー (Zigler, E.) のこの一節で始まる。

ジグラーの小論「虐待を取り締まるアメリカ——努力は失敗する運命にある」<sup>2</sup>からの引用であ

る。他の悪事であれば当人にはどうにもならない社会の側の要因を見出すはずの人が「虐待」では親の行動をしばしば絶対悪とみなし、親もまた犠牲者であるという見方ができなくなる。この「否認」の背景に、虐待という問題が人々に引き起こす強い「嫌悪」があるとジグラーは指摘している。私たちは、他の問題であればすぐにも気づくはずの疾病や障害や生活環境の影響を、「虐待する親」については見のがしがちである。「虐待とは虐待する親の問題であるから親を取り締まればよい」ことにしたくなる。子どもたちに必要な、多くの家族が切望している援助を提供せず、見おろすように傍観する。虐待問題の社会的側面をとらえることを怠ってきた援助職は自らの責任を自問自答すべきであるとジグラーは自戒をこめて表現したのである。

ジグラーは、世代間連鎖についてのカウフマン(Kaufman, J.)との共著論文<sup>3</sup>で、「虐待された子どもは親になって子どもを虐待する」という宿命論をきびしく批判した。子ども時代の被虐待歴は、親が次世代で子どもを虐待するリスクが一般人口の五倍にもものぼる重大なリスク因子である（これを虐待の世代間伝達といい、結果として世代を超えて虐待が生じることを世代間連鎖という）。しかし、次世代への虐待が生じるのは約三人に一人であり、過半数ですらない。エグランド(Egeland, B.)らが行った長期予後研究<sup>4</sup>は、被虐待歴のある人が世代間連鎖を断ち子どもを安全に養育できるようになる因子として、①虐待的でない大人からの情緒的なサポートを子ども時代にうけとることができた体験、②時期や種類を問わず一年以上の期間の治療、③安定した情緒的に支えになる配偶者、を

挙げている。地域社会のなかで他者から尊重され、守られる体験が次世代の子ども虐待を予防する。

「被虐待歴が虐待を引きおこす」のではない

「被虐待歴のある人に周囲の地域社会が必要な支援を怠ったとき

次世代への虐待が引きおこされる」のである

## 被虐待歴と解離、地域保健

被虐待環境下の子どもには、耐え難い出来事を記憶にとどめまいとして「解離(dissociation)」という現象が生じる。被虐待場面の記憶を切り離し、なかったこととして、親からの期待に因應するべく、より一層の服従で適応しようとする。被虐待が繰り返されると、解離性健忘や自己同一性の障害などが生じてくる。これらは、被虐待環境を子どもが生きてのびるための自己防衛として役立つが、思春期以降に家族の外に社会生活を広げていくには障害となる。しばしば周囲から嘘つきよばわりされ、安定的な対人関係を形成できずに孤立し、自立した大人としての社会適応の困難をもたらす。